

別冊

おいしいだものがたり

～資料館資料編～

『名誉町民 歌人 板垣家子夫の遺芳』展より

現在資料館では、特別展「名誉町民 歌人 板垣家子夫の遺芳」を開催中ということで、今回は歌人・板垣家子夫についてご紹介します。

板垣家子夫（本名：金雄）は明治37年（1904）父金次郎、母ハギの長男として誕生しました。9歳で死別した父により忠臣孝子や論語などを仕込まれたことが、歌人としての基となったといえます。本格的に作歌をはじめたのは村山農学校を卒業した大正10年（1913）頃からで、その後山形の歌人結城哀草果と交誼を結び、この縁で同14年短歌結社「アララギ」に入会しました。しかし環境が変わったこともあって思うように興趣を得られず、低迷の時期が続いたようです。

昭和6年（1931）、松尾芭蕉の『五月雨歌仙』実見のために来町した歌人齋藤茂吉に知遇を得てからは茂吉の短歌に傾倒していきます。上京時には直接指導を受けることが叶ったものの、かえって自信を喪失しさらなる混迷の時期に入りました。

そのような中、昭和12年日中戦争に応召、北支戦線を転戦することになります。このことが、作歌上の転機となりました。荒涼とした戦野にあって明日も知れぬ生命を顧みることにより、それまでの混迷を払拭し作歌意欲を取り戻していったのです。あるいは、荒んだ心身を慰撫するために極限状態が生んだ自衛本能のようなものだったのかもしれませんが。いずれにせよ、ひたむきに短歌と向き合い、常に心の拠り所として携えていたからこそ心の動きであったといえるでしょう。

昭和14年帰還した家子夫は、大石田で終戦を迎え、ほどなくして茂吉の大石田疎開が決まりました。この時期の動向については『斎藤茂吉随記 大石田の茂吉先生』に詳しく述懐されていますが、戦後間もなく何もかもが不足していた時期に茂吉を迎え、物心両面で支えた苦労は一方ならぬものがあったはず です。

茂吉帰京後も、新聞社の投稿歌壇の選者や指導者、短歌講座等の講師も務めたほか、芭蕉や正岡子規等の論考なども数多く手掛けています。中でも大石田時代の茂吉を綴った一連の作品は今読んで大変面白く、心温まるエピソードが散りばめられています。時に理不尽に怒り、時に手放して誉めちぎり、グチグチと小言を繰り返すかと思えば不器用でいじらしい姿。こうした人間・茂吉の一挙手一投足にある意味で赤裸々に描き出す眼差しは、巨人を相手に畏怖するだけではない深い敬愛の情に溢れており、そして茂吉もまたそんな家子夫に全幅の信頼をおいていたことがうかがえます。何故ならこれらの随筆の面白さは茂吉の生態観測にあるのではなく、茂吉を取り巻く大石田の人々との関係がもたらすものであり、常に茂吉の一番近くにいた板垣家子夫との関係の妙からしみ出るものだからなのです。

このような活動が認められ、昭和43年には第14回齋藤茂吉文化賞を受賞、さらに大石田町の文化事業にも関わりながら「文化の町・大石田」の確立・発信に尽力し、昭和54年大石田町名誉町民第一号が贈られました。

特別展「名誉町民 歌人 板垣家子夫の遺芳」は8月29日（日）まで



大石田町公式アカウント開設

LINEはじめました

防災情報などを
受け取ることができます。

友だち登録を
お願いします!



登録方法

右のQRコードを読み
取って友だちに追加
してください。



大石田町公式LINE

防災放送の内容を

電話で確認できます

防災放送が聞き取りにくい、放送内容を確認したい等のご意見をいただき、町では防災放送確認ダイヤルサービスを開始しました。

このダイヤルは定時（夕方6時のメロディ等）放送を含め、直近の放送から8時間以内の内容を順次聞くことができます。

確認ダイヤル：0237-48-8444

■総務課総務グループ TEL.35-2111（内線218）

町の人口 令和3年7月1日現在

世帯数	2,307 戸	(-2)
総人口	6,613 人	(-14)
男	3,264 人	(-5)
女	3,349 人	(-9)

(6月中の異動)

出生	1 人	転入 1 人
死亡	5 人	転出 11 人

※この数字は外国人数も含めた数字です。